

鶴の恩返し・隠岐郡海士町保々見

令和3年9月14日

収録・解説・酒井 董美^{たによし} イラスト・福本 隆男



語り手 川西茂彦さん（明治27年生まれ）
収録・昭和48年6月17日

あらすじ

昔、狩人が狩に出た。向こうの小枝に鶴が一羽止まっていたので、それを撃ち取ろうと狙ったところ、それを見つけた貧乏な人が、「鶴はかわいいやナンマンダブツ」とうたったので、それを聞いた鶴はびっくりして飛んで逃げてしまった。

四、五日たった後、その人のところにきれいな娘さんが来て、「自分を嫁にしてくれ」と言う。その人は、「自分は貧乏ではあるし、嫁をもらっても生活できないからにだめだ」と答えた。しかし、娘さんは、「食べることは自分ですつから、嫁にしてくれればいい」と言う。断わりきれずに嫁にしてやった。

嫁さんは、「今日は杵を借りに行つてこい」「今日は車（木綿車のこと）を借りに行つてこい」と婿さんを使いに出すそうなの。婿さんが借りてきたら、それで嫁さんが朝から晩まで糸を引き、それで機を織った

わけだ。機ができあがつたところ、嫁さんは、「町へ売りに行け」と言う。婿さんは売りに行つたところ、とんでもないよい値で売れて、帰ると嫁さんも喜ぶわ、自分も喜んでおつたつて。

そのとき、嫁さんが奥の間へ入つて、羽のない元の鶴になつてしまつて、「自分は危ない命をおまえのおかげで助けてもらった。その恩返しに自分の羽で機を織つて金に換えさせたわけだから、この金は必ずためになるように使つてほしい。何かいらぬものがあるれば買え」と言い残して去つて行つた。

そこで婿さんは、「いらぬものがあれば、買うから売つてくれ」と言つて、漁師町の方へ歩いて行つたところ、「おもしろい男が出てきた。それなら海岸近くの藻葉を売ろう」と売つた。婿さんは金が半分しか残らないし、買った藻葉の始末にも困つておつたら、漁師の親方がやつてきて、「なんと、一つ相談にきたが、乗つてくれんか」「何ごとかいな」「藻葉を売つたが、藻葉がなくなつたら魚がおらんようになつて困つた。おまえの言うほど金をやるので、契約を解除してくれ」。

婿さんも本当は金がなくなり困つていたところなのでたいへん喜んで、「おまえらが困つているようなら、契約はやめましょう」と、言うほど金をもらつてやめたわけだ。それで人に報いれば、必ずそういういいことが報われてくるから、人は助けてあげなければならぬと昔から言われている。

解説

おなじみの昔話「鶴女房」の隠岐版である。知られていない話とはいくつか違うところがあるが、特に最後の「いらぬものがあれば、値よう」に買うから……と藻葉を買うくだりは、一般型には見られない部分であるが、いかにも漁業の盛んな隠岐らしい特色だとはいえないだろうか。そしてバカにして藻葉を売つた漁師の方が、最後には逆転して男が豊かになるという結末になる。

最後に「人に報いれればいいことが報われる……」の教訓に、先祖の子孫に対するメッセージを読むことが出来るのである。

（元島根大学法文学部教授）

